

O.F. ボルノーにおける人間の開放性についての考察

川 勝 清 司

Betrachtungen zur Offenheit des Menschen bei O. F. Bollnow

KAWAKATSU Kiyoshi

序

ボルノー (O. F. Bollnow) の思想の実り豊かな多面性は、多くの人々に研究や実践の端緒を開いてきた。主たるものだけでも、生の哲学、現象学、実存哲学等との対決を通しての人間の本性への問い、その具体的展開である、人間の認識、言語性、空間性の探究などが挙げられる。これらの各々が実に大きな連関であり、個々の問題に関する見解を明らかにするにも、一、二の論文では不十分であろう。しかし、私はこの論文においては敢てそれらの個別問題のひとつを取り上げて詳論するという方法を用いず、ボルノーの思想をより全体的な観点から考察してみたい。もとより、ここで目指されるのは彼の思想のカタログを作成することではない。彼の思想を理解するうえで鍵になると思われる概念を取り出し、その位置、意味連関の解明を通して、ボルノー思想の豊かな実りを把握せんとするものである。その概念が、表題になっている「人間の開放性」die Offenheit des Menschen である。この論文では、互いに深く関連する四つの領域（哲学的人間学の方法論、認識論、時間論、対話の問題）において、ボルノーによって真に意義深く把握された人間の開放性を考察してみたい。

第一章 開かれた問いの原理

ボルノーは彼の初期の著作であり、彼自ら「自分の体系の上で最も重要な三つの本のひとつ¹⁾」に挙げる『気分の本質²⁾』の序説において、彼の哲学的人間学の方法論的原理をプレスナー (H. Plessner) に依拠しつつ定式化しようと試みている。その際、方法論上の中心原理として現われるのが、この「開かれた(未決の)問いの原理」das Prinzip der offenen Frage である。そして、彼が後に『教育学における人間学的見方³⁾』の中で哲学的人間学の方法論的原理を四つの原理に整理して提示した際にも、「人間学的還元」die anthropologische Reduktion、「オルガノン原理」das Organon=Prinzip、「個別諸現象の人間学的解釈」die anthropologische Interpretation der Einzelphänomene に続いて第四の原理として述べられている。

ボルノーによれば、本当の哲学的人間学とは、人間の生の総体的現象をその時々々に唯一の、偶然的な現象へと還元しようとする様々な研究によって、かえって人間そのものが見失なわれ、増々問題になった時代に、人間への問いの正しい形式を方法論的に顧慮しようという要求とともに生じたのである。そして、まさにこの「哲学的人間学の確実性、つまり偶然的な出発点の一面性を越える確実性の高まりの基礎たるべき」(WS 24) ことこそ、哲学的人間学の開放性 Offenheit

なのである。ボルノーはそれをプレスナーの言葉を借りて「開かれた問いの原理」あるいは、「(人間の) 不可測性の原理」と呼ぶ。従って、それは問いの内容に直接関わるのではなく、「許容できない単純化を批判的に防ぐことに努める」(AB 38) 原理である。それ故、それは単に四番目の原理なのではなく、まさしく「そこに哲学的人間学の品位と責任がある」(AB 39) と言うべき中心原理なのである。

さて、哲学的人間学は前述のとおり、研究に先立って独断的に唯一の現象が前提されるのではなく、経験的に与えられている生の現象の総体に依存する。個々の現象のすべてが、人間の生の全体を新たに見る掛替えのない出発点とされるのであり、全体的な人間の本質との直接的な関係の中に持ち込まれる。この関係を定式化したのが、「生の事実において与えられたこの特殊な現象が、そこにおいて意味深い、必然的な分枝として把握されるためには、全体としての人間の本質はいかなるものでなければならないか」(WS 16) という有名な問いである。そこに哲学的人間学における「外的現象形態の研究とより深い本質の核心との間の循環的な相互依存的関係」(WS 28) が見事に表現されている。しかし、このような方法論的原理は必然的に哲学的人間学に対して「全体の他の視座へと通じる」(AB 38) 新しい生の現象へと原則的に常に開いていつづけることを要求するはずである。しかも、そうありつつ、「我々が人間の本質として理解することが出来ると信じていたものを、常にあらためて吟味し問いたすことによってのみ、哲学的人間学は発展することが出来る」(WS 19) のである。哲学的人間学がより意義深くある、それがより「人間の本質」へと迫るためには、それは「本質的に常に開かれたまま動いて」(WS 18) いなければならないとボルノーは強調する。このような、哲学的人間学の人間の外的現象と内的本質への二重の本質的な開放性を、「開かれた問いの原理」と特徴づけたのである。

しかしながら、この原理は決して哲学の一分科の方法論的原理であるばかりではない。むしろボルノーにとっては、一般に人間を問う問いすべてが「開かれた問い」であるべきなのである。なぜなら、この原理は「人間の条件 *conditio humana* の所与からの方法論上の当然の帰結」(AB 51) なのだからである。すなわち、この原理が「(人間の) 不可測性の原理」*das Prinzip der Unergründlichkeit (des Menschen)* とも呼ばれるように、それは現存在としての人間自身の開放性(未決性)、「完結的な本質概念のなかに確定されることはできない⁴⁾」人間の本質そのものの開放性を表現していると言える。しかも、それは単に現時点において人間の生の多様性が我々の認識能力を越えているということを表わすのみではなく、ボルノーにおいては、より以上に創造的格を持つている。ボルノーはディルタイ(W. Dilthey)に由来する生の哲学的思考ゆえに、生を徹底的に創造的發展の相のもとに見るのであり、生を常に新しいものを自ら湧出させる源泉として捉える⁵⁾。つまり、生そのものが諸々の可能性へと開かれており、人間はその可能性を未来において実現するのである。ボルノーによれば、人間のあれこれの固定した本質といったものは存在し得ず、人間の本質も歴史において変遷する。いや、人間は自らの本質を形成し、歴史の中で自らを変容して行かねばならないとボルノーは考えている。まさに人間そのものが、創造的發展としてのその歴史性において、「開かれた問い」と言うべき存在なのである。

それ故にこそ、結局は一面的な人間理解、いわゆる「閉ざされた人間像」に到るあらゆる端緒に対して、ボルノーは批判的な対決を行なうのである。例えば、ここに多く引用した『気分の本質』のもう一つの目的は、不安という「ただ一つの気分から人間の情態性の完全な構造を推定す

るという方法論のやり方の不十分性を、不安から導かれる規定とは原則的に異った人間の本質への洞察を他の気分から獲得することによって証明する」(WS 68) ことにある。いかに一見純粋に形式的な存在論の規定ではあっても、「人間の生の諸々の可能性の見渡し難い多様性の背後にさかのぼってそれらに失立つ共通の根底に回帰し、そしてそのような定義的に得られる基礎から諸現象の多様性を把握しようという試み」(AB 37) は、ボルノーにとっては許容できない単純化であって、必然的に挫折せざるを得ないと見なされる。ここで注意すべきは次のことである。すなわち、間違っているのは、そのような試みによって取り出される「人間の本質」なのではなく——なぜなら、全ての個々の現象は全体の他の視座へ通じるのであるから——、「開かれた問い」を原理としない方法に帰因する一面性、その提供する人間像の歪みであるということが。そこに提供される完結した人間の全体像こそが、ボルノーに批判的対決を余儀なくさせる、決して許容することが出来ない単純化なのである。

かくして、ボルノーにとっては、本質において開かれた問いである人間を捉え得るのは、「人間の測り難さを哲学的に本気で受け取る」(AB 37) ところの、すなわち「開かれた問いの原理」を根本原理とするところの、方法論的に確かめられた哲学的人間学のみである。それ故にこそ、哲学的人間学は人間を問う問いとしての「哲学することそれ自体の根本的に新たな転回」(AB 28) となり得るのである。

第二章 開いた前理解

前章において、開放性こそが、ボルノーによって「哲学の全体を貫通し根拠づける哲学の中心学科」(AB 29) と位置づけられた哲学的人間学の根本原理であることが明らかになった。しかも、それは単なる方法論的原理ではなく、人間の生そのものの「創造的な本質」からの方法論的帰結であった。人間そのものが「開かれた問い」として捉えられたことは、当然単なる方法論以上に重要である。この章では、具体的な人間学的研究において、それがいかに展開されるかを見てみよう。その際、我々は認識論から始めるのがよいだろう。なぜなら、ボルノーは伝統的認識論の崩壊を哲学的人間学の成立の主因のひとつとして捉え、さらには、「認識論が哲学的人間学へと深化した」(AB 29) と考えているからである。彼はそこから逆に認識論の人間学的基礎づけを試み、『認識の哲学⁹⁾』において、「認識の本質と機能を人間的生の全体連関において把握し、形成された認識の事実から人間そのものをより深く理解する」(PhE 28) という認識の哲学の——「認識論の」ではなく——課題を遂行しようとする。

ボルノーによれば、伝統的認識論を、経験論にし、合理論にし、必然的な挫折へと導いた基本的な欠陥は、それらが認識の「アルキメデスの点」、すなわち、「そこから一步一步の構成の歩を進めていって確実な認識の体系に到達し得る」(PhE 12) ような究極の確実な出発点を問うたところにあった。それに対して、ボルノーは様々な研究（特にディルタイ、ハイデッガー）を引用しつつ、人間はいつも既に生と世界についてのある全体的理解を持っており、認識は常に「さしあたりほんやりと与えられた全体と共に始まらねばならない¹⁾」ことを示す。そして、ボルノーは認識の課題を、この先行する理解において「これまで不十分にしか認識されなかったものの訂正、より詳細な規定」(PhE 24) として捉える。

ディルタイによって根底的な意味において哲学的考慮に導入された、この生の事実とともに既

にいつも必然的に与えられている理解は、ハイデッガーによってその「前一構造」Vor-Strukturにおいて更に精密に捉えられた。「前理解」das Vorverständnis という概念自体もそれゆえハイデッガーに溯る。「前理解」とは、「本来的に明確で自覚的な理解の以前に在り、理解が未だ展開しないそれ以前の形態ではあるが、しかし、この未展開の形態において無力なのではなく、逆にまさにそこで隠された最も強力な作用を展開させるもの」(PhE 104)を意味する。すなわち前理解とは、人間のすべての世界概念、すべての知覚、経験等々を既に常に照らし導いているもの、いわば人間の認識の「ア・プリオリ」である。我々の認識は、いかにそれが高度に経験科学的なものであろうとも、決してこの認識の前一構造から逃れることは出来ないのである。

しかし、そのような前理解を前提として出発するとしても、なおそこには決定的に異なる二様の立場があることをボルノーは明らかにする。彼はそれらを、「閉じた前理解」das geschlossene Vorverständnis, 及び、「開いた前理解」das offene Vorverständnis として特徴づける。

「閉じた前理解」とは前理解を人間と分かち難く与えられ、いわば時間を超越した妥当性を持つ、固定したア・プリオリと捉える見解である。この見解は(ボルノーによれば)、ハイデッガーの現存在の解釈学における前理解の把握、リップス(H. Lipps)の「概念化作用への巻き込み」die Verstrickung in die Konzeptionen, ガダマー(H-G. Gadamer)の「先入見の概念の復権」die Rehabilitierung des Begriffes des Vorurteils といった把握などに代表される。彼らは、前理解を、「熟考して明らかにし、意識化することはできるが、それを変更することはできないもの⁸⁾」として捉える。ボルノーはこの見解に対して重大な懸念を表明する。我々の認識が決して逃れることの出来ない前理解が、そのように固定したものであれば、「人間は最後の理解地平線の枠内に閉じ込められてしまう⁹⁾」ことになるだろう。そこには、「前もって指示された理解の枠組みの中に入ってこないもの、枠組み全体をむしろ碎き、根本的な再検討へと強制するもの」(PhE 119), すなわちボルノーの言う「真に新しいもの」は存在し得ないことになるではないか。前章で見たように人間の生の本質をその創造的發展に見るボルノーにとって、そのような「過去に引き渡され、未来の新しい、見通さなかった、また見通し得ない多様な可能性への開放性をまったく持たない」(PhE 119)ような人間の姿は決して受け容れることは出来ない。未来においてその可能性を実現すべき人間にとっては、真の未来を欠いた閉鎖的な世界などというものは絶対に相容れないのである。人間には真の意味で未来が存在すべきであり、「人間は生が提供する新しいもの、予測不可能なものへと開かれていることが可能でなければならない」(PhE 119)のである。そこで、ボルノーにとって、認識の問題は次の二方向をもつ問いに集約されてくる。すなわち、「一方では如何にしてすべての具体的個別的経験に対して原理的な無始性の意味での生理解の先行性を確保できるか、他方、如何にして、この生の理解を前理解の主観性のなかに人間が閉じ込められるのを避けるように把握するか」(PhE 119)という問いに。彼はむしろ、「この生の理解を新しいもの、予見されなかったものの経験へと開かせる」(PhE 119)という課題へと論を進めて行く。

この二方向への問いの答えが、「開いた前理解」として提出される。すなわち、このような「持ち込まれた前理解と新しいものの経験との解き難い結びつき」(PhE 152)という「限局と開放の力動的な構造¹⁰⁾」が、「開いた前理解」という、ある意味において矛盾する概念によって包括的に示されるのである。それは、絶対的に新しいものの経験によって、常に変容し、増加し、訂

正される前理解であって、「成長するア・プリオリ」(PhE 145)である。逆に、前論解が開いている、つまり人間が決して固定的な前理解の中に閉じ込められているのではないことによってのみ、人間にとって新しいものの経験は可能なのだと言うことが出来る。このような、経験を導く前理解が再び予見不可能な新しい経験に依存するという循環的な過程においてのみ、人間の認識は前進し得るということを、ボルノーは解明した。そして、この開いた前理解の解明によって初めて、「人間の認識作用全体を人間の本性の歴史性のなかへ組み入れる」(PhE 152)という認識の哲学の課題が遂行され得たのである。

以上によって、次のことが明らかになった。ボルノーの認識の哲学において最も重要な概念である「開いた前理解」とは、創造性、あるいは歴史性という意味での人間の本性の開放性の必然的な帰結である。それは、生の諸々の可能性への開放性を、決して前理解から逃れることの出来ない認識(作用)においても保証しようとする試み、すなわち、「未来へ向けて開かれた人間の全歴史性が、人間の認識に対して実現されるように把握する」(PhE 119) 試みに他ならないのである。

第三章 開かれた時間

以上の考察によって、「開放性」、オッフェンハイトがボルノーの思索、人間理解において決定的な位置を占めていることが確認された。しかし、そこではなお開放性が具体的にいかなる構造連関を持つのかは、十分明らかになったとは言えないだろう。それは、創造性、歴史性等の他の概念で十分表現し得ることの、単なる、しかもよりあいまいな言い換え以上のものではない、との印象を与えたかもしれない。それゆえ、ここでは更に進んで内容的な考察が為されねばならないだろう。実際、ボルノーによって明らかにされた人間の開放性は、以下の考察で取り上げられるような、より具体的な意味を持つゆえに、実践を離れては在り得ない我々教育を考える者にとって一層重要な意義を持っているのである。その際、我々は「開かれた時間」die offene Zeit、すなわち人間的時間の開放性を主題とする、ボルノーの時間論、人間の時間性への人間学的考察¹¹⁾を手掛りとするのが最もよいと思う。なぜなら、開かれた時間は、「新しい経験の前提」として前章と直接の関連があり、人間の創造性、歴史性は時間の開放性の解明によって初めて、単なる主体性論や歴史的被規定性論に傾くことなく、ボルノーの考える意味において把握され得るからである。そして、つけ加えるならば、私が彼の思想の開放性という中心概念に導かれたのも、時間性への問いがきっかけとなったのである。

さて、ボルノーの時間論においては、当然これまでの論述からも分るように、人間の未来との関係が特に重要な意味を持つ。彼は、ハイデgger、ミンコフスキーらに同意して、「人間は優れた意味において未来の存在である」(VZ 56)と強調する。「根源的かつ本来的な時間性の第一義的な現象は未来¹²⁾」なのである。未来とは、まだ開かれている可能性の領域であって、人間は自然な生活態度においてそこへと向かうのである。ボルノーにとって、未来の優位性はこの開放性に根ざしている。我々は先ず未来の開放性(「開かれた未来」)を手掛りとして、ボルノーの捉えた人間の開放性の具体的構造連関に迫っていこう。

ボルノーは人間の未来への関係をその二方向性において把握する。一方では、人間は自らを積極的に未来へ押し進んで行くもの、さらには「自分の未来の自由な形成者」(VZ 57)と感ずる。

他方、人間は自分の方に向ってくる未来を知っており、その場合自らを、「未来が彼に示してくれるものに引き渡されている」(VZ 57)と感ずるのである。これは、「我々が未来の出来事を予見し、あらかじめ計算することさえ出来るような、いくつかのことがあり、しかし、それに並んで、我々がまったく予見することの出来ない多くのことがある」(VZ 58)という、人間の時間的態勢の基本構造 *die elementare Struktur unsrer zeitlichen Verfassung* に根ざしている。

ボルノーはまず、自由かつ形式的に未来へと進んで行く、活動者としての人間から考察を始める。ここで問題となるのは、「人間が未来の中へと目標を投企し、それに必要な手段について熟考するような事例、しかも、それが後の生活に持続的に影響を持つような事例」(VZ 60)である。未来へのこのような目標志向的行動は「計画」*Planung* と呼ばれる。それは、人間が未来に対して負っている責任を果すのに不可欠なことであり、人間が未来に対して持っている一定の力を徹底的に利用するという課題として、積極的かつ重要な意味を持っている。それ以上に、自主性、主体性を過度なまでに重んじる現代の「進んだ」思考にとっては、まさにこのような「責任ある形成」を許す未来のみが、真に開かれた未来と考えられていると言ってもよいだろう。確かに、それも未来の開放性を構成する重要な側面ではある。しかし、ボルノーはむしろ、「計画的思考の無批判な過度の追求は未来の関連のもう一つの少なからず重要な側面を無視し、ついには人間の生活に宿命的な作用を及ぼす」(VZ 61)と警告する。すなわち、無批判な計画的思考は必然的に「閉じられた時間」に帰結するのである。なぜなら、一般に信頼しうる計画は「予見され得ないものは何ら存在せず、一切は一定の、確定した、我々にとって認識可能な法則に従って起こるがゆえにのみ」(VZ 63)可能なものであり、計画の理念に従えば、「事物は本質上すでに完結して」(VZ 62)いなければならないからである。ある計画の実行においては、内容的には不変のまま、ただ計画されたことの実在性がつけ加わるのみであり、何ら新しいことは出現しえず、また出現してはならない。ボルノーは、これを「閉じられた時間」あるいは、「閉じられた世界」と特徴づけている。計画の完全さと世界(時間)の閉鎖性とは互いに厳密に対応しており、そこには本質的に創造的なものは存在し得ないのである。

しかし、我々はそのような「閉鎖性」が実際には成立し得ないことを知っている。「いかに用意周到な計画も、予見しえないものによって、偶然と運命によって措定された限界、一切の人間の努力を挫折させる限界におつかる」(VZ 62)のである。未来の開放性とは第一義的には、原則的に予見しえない、ある新しいものが出現する可能性を表わす。未来は先ずその「見通し難さ」において捉えられねばならない。すなわち、「人間は人生の原則的に廃棄できない不確実さを意識して自己に引き受けねばならない」(VZ 72)。ボルノーは、この点で実存主義によって特徴づけられた真の不安や絶望を正当に評価する。しかし、その引き受けが単なる不安や絶望だけに終わらないためには、「人間を助けてこれらの誘惑を免れしめる力」(VZ 90)、つまり、にもかかわらず我々に未来へと進み行く勇気を与える力、が必要であるとボルノーは考える。彼はそれを「希望」*die Hoffnung* と呼ぶ。希望とは、人間が自らの限界を自覚しつつも、なお未来の見渡しえない開放性を真剣に自己に引き受けるときに、不思議な転換 *Umschlag* において到達する、「未来への信頼に満ちた関係」(VZ 72)である。ゆえに、それは何らかの具体的形象に結びついた「小さな」希望ではない。それは、「自分の行為がともかく何らかの仕方で一つの意味を持つという確信」(VZ 108)、本質的に無形象であるべき「絶対的な」希望である。しかし、我々は

ここではこのいささか神秘的な転換には深入りせず、もう少し具体的な、分かり易い側面を取り上げるべきだろう。ボルノーの言うように、「もう一つの重要な新しい側面」(VZ 97) が考察されるべきである。それがまたこの章の課題にはより適していると考えられる。

まず、予見しえないもの、新たなるものが常に破壊的な運命や妨害的な偶然ではないことが指摘される。それはまた、「我々が利用することを知っていれば、……まったく新しい可能性を開示し、生をおよそ期待された程度をはるかに越えて豊かにし、美しくもする」(VZ 98) ような、幸運な偶然でもあり得るのである。しかし、それは自己満足して自分の殻に閉じこもるもの、完全な計画という幻想に執着するものには決して体験され得ない。幸運を受け取るためには、「独特な目覚めた状態と心を開いた状態 eine eigentümliche Wachheit und Offenheit が必要なのである」(VZ 98)。すなわち、「未来の予見しえない贈与への信頼に満ちた用意」(VZ 96) において、人間は未来に対する開放性を持たねばならないのである。(ボルノーはこの内的態度を G. マルセルによって説明している)。しかし、未来への開放性が幸運の受容においてのみ創造的であるというのでは、やはり現象の豊かさはその本質においては捉えられていない。そこには、人間の自発性、責任ある形成に対する正当な位置づけが欠落しているからである。

それ故、ボルノーは更に進み最も核心的な考察へと入って行く。そこでは偶然や運命はもう一度人間の活動的な未来への進み行きに対する妨害、抵抗として捉えられる。しかし、それらはもはや計画を挫折させるだけの単なる厄介物ではなく、「生産的思考がそれによって発火し、これまで知られなかった解決を生み出す出発点」(VZ 101f.) となるのである。ここにおいて偶然と計画とは、新たな課題の挑戦と人間の創造的な応答として、前者が修正しつつ、また改善しつつ後者にくい込むことによって真に創造的な関係に入るのである。ボルノーにとっては、「人間の生の生産性は……原則的に予見しえない偶然として外部からそれに立ち向ってくるものとの、未来へと前進する運動の絶えざる対決においてのみ生ずる」(VZ 105) のである。「未来の開放性」は、この「絶えず新たに妨げられ、しかもその妨害を克服してゆく計画という、二元論的図式」(VZ 104) においてのみ、その十全な本質、その全き豊かさにおいて把握され得るのである。この事態をボルノーは、「開かれた未来」あるいはより一般的に、「開かれた時間」と特徴づけるのである。それ故、彼は独自の立場から希望の哲学を發展させた二人の思想家、ブロッホ (E. Bloch) とマルセル (G. Marcel) について、その見解を正当に評価しつつも、前者が真の意味での偶然を知らぬゆえに、また後者が人間の自発性、計画を知らぬゆえに、ともに決定的な限界を持つと批判する。ボルノーにとっては、真実はブロッホとマルセルとの統合においてあるとも言えるだろう。すなわち、「[内部] からやって来る能動的な形成意志と、[外部] からやって来る呼びかけを受容する応答との間の交互作用において初めて、人間と世界との対話的な関係が生じ、それによってのみ、本当に創造的な発展が可能なのである」(VZ 97)。

かくして、開かれた時間において現われる人間の開放性は、徹底的にこの二方向性において、しかも決して一方的な優位に到ることのない、(形成的) 能動と(応答的) 受容との交互作用において把握される。ボルノーはそれを「対話的な」交互作用とも呼んでいる。それ故、ここで性急な結論に移る前に、「対話」(言語性の問題) を取り上げ、そこにおいて示された開放性の意味を更に考察してみよう。そこにおいて人間の開放性が、これまでは意識的に深く取り上げなかった(ボルノーはしばしば言及しているにもかかわらず)、更に深い意味において解明されねばな

らない。

第四章 開かれた対話

「対話」Gespräch とはボルノーにとって、「人間が人間らしい仕方と言語を使う方法¹³⁾」を意味する。しかも、彼はハイデッガーの次のような言葉に基本的に同意する。「とはいっても対話は言語が自己を展開するひとつの仕方にすぎないものではなく、言語は対話としてのみ本質的なのである¹⁴⁾」。人間の人格性の形成に言語が決定的な意義を持つとすれば、人間は対話においてのみ人間性に到達することが出来ると言っても言い過ぎではない。それゆえ、ボルノーはこの対話の本質、その諸前提を問うのである¹⁵⁾。

本物の対話は、「自己内で首尾一貫した、一次元的に前進する連関を展開する」(DW 34) ことを根本特徴とする独話的な話し方 *das monologische Sprechen* (証明、講演等) から明らかに区別されるとともに、本質において独話的である、単に形式のみ交互的な話し合い(学問的な討論、政治的な議論等)からも厳密に区別されねばならない。本物の対話においては、話者が語ることを中止して、考え込むことを余儀なくさせられるような中断が無拘束的な形で生じる。そして、そこで「話者は異論に出合い、新しい問題提起を引き受け、それに対して自分自身の考えを主張し、さらに、新しい思考過程に立ち入らざるをえなくなる」(DW 36) のである。これは当然一方の側にだけ関するのではない。「現実の対話は交互的な中断と継続の不断の過程において成立するのであり、この過程に双方は同等に関与している」(DW 37)。かくして、「独話的な思考が中断し、また障害と対決するところに、本来的に創造的な思考活動が始まる」(DW 36) のである。このような対話こそ、「実り豊かな、開かれた対話」*ein fruchtbares, offenes Gespräch* であって、まさに「真理の場所」*Ort der Wahrheit* と呼ばれるべきものである。

ところで、ここに示された対話の開放性は前章で計画と偶然の交互作用として明らかになった時間の開放性と同じ連関であることが気づかれるだろう。つまり、計画は独話的思考に、偶然は相手の立てる異論に相当する。ボルノーがそこで「世界と人間の対話関係」を語ったのもその故である。であるから、我々はここではこれ以上この連関には立ち入らず、ボルノーの所説に従って、対話の前提へと論を進めることにしよう。

対話の前提とは、上述のような本物の対話が成功するために関与者に対して立てられる「開放性」の要求と言える。ボルノーはそれを「話すこと」と「聞くこと」という二つの能力として示す。それは、人間の開放性が能動と受容の二方向を持っていることに対応する。ボルノーはこの余りにも自明的な、「まさに疑わしいほどに平凡に聞こえる」(DW 42) 二つの能力から、対話に不可欠な人間自身の内的態勢 *innere Verfassung*、厳しい道徳的要求を導き出す。

「話す能力」とは、ここでは、「心を開いて自己を表出すること¹⁶⁾」である。それは「自己を相手の手中にゆだねること」(DW 42) を意味する。このことは著るしい勇気を必要とする。なぜなら、「話す者は自分の言わんとすることがどのように受け取られるか……知らない」(DW 53) からである。単に理解してもらえない危険ばかりではなく、「私の率直な言葉がかえって相手の手に、後に彼が私に対して逆用するかもしれない武器を手渡すことになる」(DW 43) 可能性もあり得るのだ。それ故、率直に話すこと *das offene Sprechen* は常に冒険であり、「賢明な」人は容易に本心を表わさない。しかしながら、「安全を断念することなしには、まさにいかなる

本物の対話も可能ではない」(DW 43) のである。

これに対して、「聞く能力」とは、「心を開いて耳を傾ける¹⁷⁾」ことを意味する。それは単に他者の言葉をその通りに理解するというだけではなく、「他者の言葉に応ずる用意があるということ、すなわち、それがわたし自身の見解に矛盾する場合でも、それを単純に拒否せず、率直に応ずる気持ちでそれに耳をかし、自分を納得させ、学び直すだけの用意がある」(DW 44) という深い覚悟である。そして、それには当然「自己自身の優越性への信仰を諦めること、あらゆる権威的要求を断念して、他者を原則的に同等の権利を持つ相手として承認すること¹⁸⁾」が必要なのである。

このように、対話の前提たる「開放性」とは「二重の自己克服」を意味する。一方で生物特有の不安から発現する自然な安全追求の努力が断念されねばならず、他方、人間の「本性」たる素朴な自己中心主義が放棄されねばならない。言い換えれば、「安全と権力の獲得に向けられた『本性のままの』生活態度を、話すことと聞くことという率直な覚悟のなかで克服すること」(DW 44) によってのみ、真正の、開かれた対話は成就するのである。かくして、人間の開放性はその最も深い意味において捉えられた。すなわち、人間の開放性とは決して自明の、自然の贈物ではなく、「人間が高度の道徳的努力においてのみ達成しうる人間自身の内的態勢」(DW 73)、まさに、「労苦して獲得されねばならない徳」(PhE 137) なのである。

ここで、我々はこのような人間の内的態勢を前提として、前章で深く考えなかった「希望」をもう一度語ることが出来るだろう。ボルノーはこの内的態勢をリップス (H. Lipps) の言葉をかりて、「自らに透徹すること」 das Sich-selbst-durchsichtig-werden と特徴づける。その人には何ら留保するもの、執着するものがないので、彼にとっては何ものも最終的に破壊的なものを意味しない。それ故、彼は安んじて対話の中に出て行くことが出来る。しかも、その時彼は同様にこの厳しい労苦を自らに引き受け、自らを開いて彼を受け容れ、彼へと近づいてくる他者の姿を認めるであろう。他者はもはや不安の原因となる存在ではなく、彼を支えてくれる存在となるのである。このような支えへの確信こそ、「希望」に他ならない。それは時間においても同じである。彼には縛られて身動きのとれない「計画」などはないので、未来の予見しえない贈与に対して開放的であり得るのだ。何かしら神秘的と見られた希望は、ここにおいて、人間の開放性の連関へともう少し具体的な形で組み入れられるのではないだろうか。この意味において、我々は開放性を問いつつ、まさにボルノーのいま一つの重大な概念「被包性」Geborgenheit の連関へと到ったのである。しかし、ここではこれ以上深く考察する余裕はない。

まとめ 開放性への教育

我々は、ボルノーによって捉えられた人間の開放性を、次の三つの連関にまとめることが出来るだろう。

- 一 創造的発展としての、人間の歴史性
- 二 創造的発展の具体的過程としての、形成的能動と応答的受容の交互作用
- 三 その交互作用の前提たるべき、人間の内的態勢、あるいは二重の自己克服

もちろん、私はこのボルノーの見解に全面的に同意しているわけではない。特にボルノーの人間の歴史性の理解にはどうしても疑問が残る。人間の様々な現象が歴史の中で創造的に発展して来たのは事実であるとしても、はたして、「人間の本質」の歴史における変容、もしくは成長と

いうことはあり得るのか。本質の成長とは何を根拠に、また何を検証基準として言い得るのか、という疑問である。ボルノーによるそれに対する明確な論述は、私の探究の範囲では得られなかった。現時点では、それはもはや検証の問題などではなく、ボルノーがそのような人間の歴史性を事実として経験し、生きているとしか言いようがない。ただこの問題はボルノー思想の根底に関わるものであるから、今後の更なる対決が課題として残る。

しかしながら、ボルノーが明らかにした開放性の教育に対する意義は、このような疑問によって減ずることはない。とりわけ教育が自らを「発達の援助」と規定し、その課題を、「未来の担い手たちが、独立した一個の主体的人格として、それぞれ自己を創造的に実現してゆくのを最善を尽して援助すること¹⁹⁾」また、「歴史の中で歴史をつくる主体、文化を創造する主体として(生れたものを)育成すること²⁰⁾」と捉えたとすれば、かくの如き「人間の開放性」を認識することなしには、教育はあり得ない。すなわちここに開放性の概念で捉えられたのは、生の成長の基本構造、人間の真に創造的な営みが決してそれ以外の仕方ではあり得ない基本構造なのだからである。しかも、ボルノーはそれを能動と受容の一方にかたよらない、真に交互的な過程として示したのである。これは人間の創造性を単なる主体性、自発性のみに根拠づけようとする思想が「進歩的」ともてはやされる現代においては特に重要な意義を持つ。受容を何らか消極的、むしろ屈従的なこととして拒絶する現代の状況にあって、応答する受容として、受容の真に創造的な性格を明確にし得たことは、ボルノーの思想の最も意義深く、重視されるべき実りであると私は考える。

そして、更に注目すべきは、かくの如き創造的交互作用の前提が、人間の内的態勢としての開放性として明らかに示された点である。すなわち、学び直し、問い直し、修正する覚悟において自らを不断に問いの中に立てつつ、形成的意志を持って安易な日常的安全性の世界から出て行くという、二重の自己克服を前提としてのみ人間は創造的で在り得るのである。それは、この開放性は人間にとって生得的なものではなく、まさに「労苦して獲得されるべき徳」であることを意味していた。それ故、教育が「創造的な自己実現の援助」たらんとし、「創造的主体の育成」を目指すならば、教育は何よりも先に、かくの如き「人間の開放性」へと人間を導き、獲得させる営みでなければならないのである。かくして、「開放性への教育」こそは、教育の最も重要な課題として我々の前に立てられるべきである。私は教育がまさにそのような力を持っていると確信するものであり、この力を具体的に解明し、示すことを今後の課題として自らに課したいと思っている。

<註>

- 1) ボルノーの著作、『人間と空間』の邦訳者への書簡中の表現、同訳書あとがき、
- 2) O. F. Bollnow: Das Wesen der Stimmungen, Frankfurt a. M. (1941), 1974⁵. WS と略記、以下の著作も訳のあるものは参照した。
- 3) Bollnow: Die anthropologische Betrachtungsweise in der Pädagogik, Essen, 1965. AB と略記
- 4) 森田孝: 教育人間学における「開かれた問い」の原理の意義、「教育哲学」第25号、1972所収。
- 5) Bollnow: Die Lebensphilosophie, Berlin-Göttingen-Heidelberg, 1958 参照のこと。
- 6) Bollnow: Philosophie der Erkenntnis, Stuttgart, 1970. PhE と略記。
- 7) ボルノー講演集「対話への教育」東京、1973. S. 85 講演名「解釈学的、批判的認識論」
- 8) 上掲訳書 S. 93f.

- 9) 上掲訳書 S. 94
- 10) 森田 孝：＜前理解＞と＜開放性＞の諸問題，大阪大学人間科学部紀要第四巻，1978，S. 123
- 11) Bollnow：Das Verhältnis zur Zeit, Heidelberg, 1972 がこの章では取り扱われる，VZ と略記。
- 12) M. Heidegger：Sein und Zeit, Halle/Saale, 1927. S. 329, VZ S. 56 に引用されている。
- 13) ボルノー講演集「対話への教育」，S. 1 講演名「対話への教育」
- 14) M. Heidegger：Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung, Frankfurt a. M. 1951². S. 56
- 15) Bollnow：Das Doppelgesicht der Wahrheit, Philosophie der Erkenntnis II, Stuttgart, 1975 がこの章では主として取り扱われる。DW と略記。
- 16) ボルノー講演集「問いへの教育」東京，1978，S. 192 講演名「問いへの教育」
- 17) 上掲訳書 S. 195
- 18) 上掲訳書 S. 195
- 19) M. J. ランゲフェルド講演集：教育と人間の省察，東京，1974，S. 30 講演名「教育か，条件づけか」傍点は原文のまま。
- 20) 前田博：教育の本質，東京，1979，S. 33. かっこ内筆者。

（本研究科博士後期課程）